

せなかむい

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第五十七号（一日発行）
平成六年六月一日

北海の古平風土物語（三三）

南部大黒と津軽ヘントコ（上）
担任・千葉信夫先生（二十二歳）

高橋源五口

雪の多い年であった。二月の
中ごろのこと。

学校から帰ったら、家に見た
ことがない二人の客がいた。茶
の間で父（小野寺源太郎）と、
長兄（小野寺地作）と客の面々
が、変わった弁コと口調で話し
ているのが聞こえる。

居間にいた母（小野寺カン）
から、客の二人は、長兄が昨夏
のお盆のころに、津軽の酸ヶ湯
（青森県酸ヶ湯温泉）に湯治に
行った時の仲間の人たちで、南
部八戸在の農家の大黒さんだ。
豊作祈願に、冬中あちこちと地
方を廻っているんだ。と、聞か
された。

そのうち長兄が居間に来て、
私と弟の二人に、使いに行つて
来るようにと言う。

「南部大黒が着いたから、明日
の夕方から夜なべに、家に寄る

ように言つて来い」
と、使いの先を書いた紙切れを
よこした。弟と二人で、電報配
達役になった。

部落会（当時は、古平町第九
区部落会、後に公園部落会、現
在の栄町内会）や鴨居木・泥の
木・ガ口の沢方面にいた親戚、
縁者、とごろ衆（旧南部地方か
ら移住して来た人たち）の家々
を廻つて歩いた。

当時、古平のこの地区は特に
雪が深く、吹雪もあつて、道路
には所どころに吹きだまりがあ
つた。幅の狭い、深い溝のよう
な道路が長く続いていた。道路
の真ん中辺りは馬そりの跡や、
馬の足跡が穴になつていてひど
い悪路であつた。大きなちよう
ちんを持っていても、ゴム長靴
では足を滑らせたり転ぶことが
たびたびで、急ぐとなお転びや

すかつた。二人とも、靴にわら
縄を巻つけて滑り止めにした。
途中の出戸の沢、ススキナイ
の沢から吹き出す風は強く、そ
のしばれ方は特にひどかつた。
ダルマ（袖の短いだるま型のマ
ント）を着て、目出し帽（毛糸
で編んだ筒型の帽子）をかぶつ
ても耳が刺すように痛く、目出
し帽の口の回りは、吐く息で霜
が着いた。凍る程のしばれの強
い夕方であつた。

翌日の夕方になると、使い先
のみんなはガツチリしたまかな
いでやつて来た。ちようちんを
下げ、風呂敷包みをぶら下げた
り背負つたりして、モンペ姿に
つまごを履き、けえんずき、
（かんじき）を縛りつけて、丈
夫な、けえんずき、（木製の丈夫
な雪鋤）を突きながら来た人た
ちがおおかたであつた。
夜の雪道を、転ばぬ先の杖で
でもあつたのだろうか。家の広
い土間に、この人たちの履いて
来たさまざま履物がいっぱい
に並んだ。

●シャリカニのこと

曹谷（宗谷）支配の内
のシルシという所に、シ
ヤリカニが多い。聞くと
ころでは、松前にも多く
いるということである。
アイヌの人たちは「タビ
シトンベコロベ」と言っ
ている。形はエビに似て
いるが、カニのようでも
ある。病気によるものな
のか、このカニの尻に玉
のようなこぶができるこ
とがあるが、このこぶが
できると間もなく死ぬ。
このこぶを取り出して作

アイヌの《ことわざ 世間ばなし集》から

つたのが「オクリカンキ
リ」という葉である。
このカニは「味噌を好
む」ということが本に出
ていて、村内を流れるラ
イタンネナイという川で
味噌を流してみたところ
全くそのとおりで、四、
五十匹のシャリカニを捕
らえることができた。
アイヌの言うのには、
飲み水が濁つたり味が悪
くなつた時に、このシャ
リカニを捕らえて来て水
中に入れて置くと、良い
水になるといふ。

何かを残したい

五月二十四日夜、布団の中で急いでペンを走らせている。今朝からの雨でグラウンドはビショビショ、新しい中学校の工事が思いのほか進んでいます。五月は旅行の季節か、道外・沖繩・その他と、古平の方も随分と楽しんでおられるようで、良い時代になったものと喜んでおります。少し前にフキノトウが出たと

故郷を想う福井孝平

思ったら、もう桜が咲き、アツという間に今年ももう半分が過ぎてしまいました。「せたかむい」も、毎月同じ顔ぶれでなく、毎回いろいろな方が投稿してくれるとありがたいのですが、少しばかり気になります。旅行のお話でも、一行でも寄せていただけませんか。文章を書くなんて思わないで、茶飲み話で結構です。私たちも努力して続けていくことを決意し

ています。いつか町外史的なものになるかも知れないし、ふるさとのもろもろの話が記録され将来の何かの足しになるのではと思っています。皆さんで育ててみたいものです。「せたかむい」を見てくれる方も増えています。ありがたいことです。私も暇を見ては、中央集会所などに行つてはお年寄りのお話などを伺つていますが、参考になることばかりで、いつかそんなことを書いてみたいと思つています。皆さん、こぼれ話を拾つて「せたかむい」をおもしろ

いものにしていきましょう。ぜひともお話だけでも教えて下さい。もう古平を逃れられない私たちです。何かを子孫に残しておきましょう。余生を故郷に捧げましょう。◆ 所作を継ぎ天狗火渡り祭りかな 雛の日や母の忌としてある限り 自販機のコーヒー冷えて軒げ出る

古平場所と岡田家

大きな富みを生んだ場所請負

先月号で、場所請負をする時の権利金である運上金について書きましたが、金額のケタを間違えて申し訳ありません。当時の金額を「金」の値段から、単純に今の金額に換算してみました。ついでにもう少しその金額について調べてみたいと思ひます。

古平場所を請負つた岡田家は運上金として七十八万円ほどを納めていますが、では、この当時の武士の俸給と家計の様子はどうかだったのでしよう。ちょうどそのころの記録がありましたので、それらを参考にして比べてみることにします。

千石取りの武士というと、小さい大名家の家老職にあたります。米が千石とれる領地を貰うわけですが、そこから上がる年貢米は三割五分が標準でしたから、収入は三百五十石となりま

三百九十両でしたから、それを受け取つた知行主は、本州の大名の家老以上の収入があつたわけです。けれども、本州とは比べものにならない程のきびしい生活条件だったのでしようから、額面どおりというわけにはいかなかったでしょう。

一方、これだけの運上金を納めても場所請負をすると、これを何倍も上回る儲けがあつたといひますから、その豪華な生活ぶりが想像できます。しかし、儲けを増やしたのは、そこからの生産物を北前船で運んだことが大きな理由であつて、このことは後で述べることにします。

前に戻つて、天明年間（一七八五年前後）に書かれた「西蝦夷行程記」という本によりますと、当時の古平のことを次のよ（※ 四ページ三段目へ）

訂正 前回の運上金「七百七十八万円」は、「七十七万八千円」の誤りです。

一兵卒の軍隊日記

(最終回)

よつやく懐かしのわが家へ

本間 銀朔

やがて「召集解除が近いようだ」と、いう噂が広がった。そうしている内に、四月二十二日付の余市駅までの切符と、一か月の給料（七円足らずであったと記憶しているが：）が渡された。

「本当に家に帰れるんだ」と、この時はじめて実感として感じる事ができた。全員が、「良かった、良かった」と喜び合った。

私も、事務室での使役もこれで終わった。あと二、三日で家に帰れるんだと、班内の誰もがみんな気が緩んでいたようだ。こんな時の安心が禁物で、その後が悪かった。

日中に、当番の下士官が廊下で「達し」と大声で叫ぶと、その時には、直ちに班内から誰かが出て行って「達し」を受け、班長にその内容を報告することになってはいるのだが、その伝達を受ける者は決めていない。もし伝達を間違って報告したりす

ると班長にドヤされるので、進んで受ける者はいない。

ある日「達し」があった。班長が二人とも不在で、昼食前だった。すると、下士官が荒々しくドアを開けて入ってきた。

「二班は誰もいないのか！ いるではないか、下に来て全員一列横隊になれ！」

と言われ、整列するかしない内に、全員の『あご取り』が始まった。物凄い早さで、しかも強烈であった。後ろにのけぞる程の強さであった。帰り間際になって、全員が一発づつやられてしまった。

班長が帰ってきてまた叱られた。幸いなことに『あご取り』はなかったが、『あご取り』は輻重隊（しちようたい）独特のものと言われた。並べておいて五十人ぐらいをやるのに一分もかからない。

二十四日のいよいよ帰る朝、



シコロの碑

《今よみがえる

シコロの木》

厳島神社の境内に建っているシコロの碑は、古平の海難事故として有名な「第二出羽丸」遭難者の慰霊と、乗組員や乗客の救助を記念して建てられたものです。

明治四十五年三月、目の前で起きたこの遭難と救助に当たった人々の献身的な活躍は、海に生き

昭和六十年九月十六日
建立・函館市佐藤亀治

る人の感動的な物語として、町民の間で永く伝えられてきました。

その主役が、当時、神社裏にあったシコロの木でしたが、その後、枯死してしまいました。

この度、その由緒あるシコロの木を復活させようと、水見八郎さんがシコロの木を寄贈してくれ

ることになりました。
(町広報二二三号参照)

雪の営庭に全員が集合し、私物の検査を受けた後、隊長からの訓示があった。

「今、一時帰郷するが、再び召集のあることを覚悟しているように——」

九部隊にいた古平町の出身者は、みんな一緒になった。中には兵舎を振り返って見る者もいたが、私は、急いで旭川駅に向かった。

旭川駅から汽車に乗り、余市駅まで来た時はホッとした。棧橋から金華丸に乗り、古平に着いたが、家族は迎えに来ていない。家族には知らせていなかったのだ。

古平に着いてみたら、古平では鯨が大漁で沖揚げの真つ最中であつた。

わずか一か月の入隊経験ではあつたが、あまりいい所ではなかった。この大戦で、同級生も七人が戦死している。もしもあのまま千島方面に出動していたら、今ごろは忠魂碑に祀られていたことだろう。

幸いにも七十七歳まで生きてこられた。戦争など再び起きないことを祈念して、ペンを描くことにする。

『古平の大火』

渡辺ハツエ

今年もまた私たちにとつて忌まわしい日がやって来た。昭和二十四年五月十日。町を大火が襲ったのだ。焼失家屋七百戸。風下にあつたわが家も全焼した

思えばあの日は朝から漁師泣かせの南西の風が強く吹いていて出漁できず、夫と弟は畑を耕しに行った。正午ころサイレント半鐘が鳴り出した。外へ出てみると風上の方で煙が見えていた。さあ大変。風はますます強くなり、黒煙が広がってきた。夫たちが山から息せき切つて帰つてきて、二人で屋根に上がつて水をかけ始めた。隣町に住む伯母さんといとこが駆け付けてくれて、夜具や衣類を前の浜まで運び出した。

当時皆若かつたので、力の続く限り夢中になつて活躍した。私は六か月の長女を背負つていた。火はますます接近、身の危険を感じたので、最後の手段で一家七人が船に乗つて浜辺を離れた。高波と向かい風で思うように進まない。夫と弟が必死の努力で私たちを安全地帯の港へ

避難せてくれた。

今でもあの日のことが忘れられない。そして火事は恐ろしいと改めて思う。

(北海タイムス「女性の窓」に掲載されたものです)



【今日日はこんな日】

①公園の夜桜に人の波 当時珍しい自動車で見物客

入船町で、大きく鯨漁場を経営していた山口金治さんは、水戸市にある日本三大公園のひとつ偕楽園を見て感動し、自分が所有していた土地に公園を造ることを計画した。今の栄町と鴨居木の境にかかる約五千坪の土地に、樹木を植え、池を掘り、別荘を建てて、広く町民にも解放しようというものであった。工事は大正八年ころから始ま

(*二ページ四段目から続く)に書いています。(アイヌ語地名と、該当する現在の地名の項目だけを抜き書き)

アイヌ語地名 現在の地名
ヘロカラウイシ 群来村

モヤシヤム

メメタライ (本陣町)
チヨヘタナイ

ヲヲカフ 沢江町

メナシトマリ 歌棄町
オタスツ

チロンノナ 沖町
ラルマキ

り、自家の鯨場が終わるとそこで働いていた漁夫たちや、庭師のほか、常時、五、六人の人夫が働いていた。鯨粕を炊く薪を切り出すのに山へ入った時に木を見つけては運び出し、夏の間、歌棄海岸から庭石になりそうな石を探しては、冬に馬そりで運んだという。同十一年五月には別荘の建前が行われ、池もできた。

同十三年五月二十三日
「夜停電したが、①公園へ夜桜見物に行く。大勢の見物人が来ていて、賑やかであった」
同十四年六月十二日

「別荘が年々良くなる。今日も人夫が五、六人で植樹している」

昭和四年六月十二日
「①公園の例祭日、自動車で行く見物客もいる。売店も多く出ている」

あずま屋が建ち、池には緋鯉などが放され、このころで公園は完成し、偕(ともに)楽(たのしむ)ということから『偕楽園』、別荘は『深山荘』と名づけられた。

古平大火のあと、山口さんでは別荘を解体して現在地に移築したが、棟梁は真貝常吉さんであった。住宅にしたので居間など改造したが、ほとんどは建築当時の造作であるという。

外から見た特徴は、屋根の勾配が直線ではなく、丸みをもってることである。

公園の土地はその後売却されて、現在は耕地になつていて、小道だけが残っている。

(「一」内は高野名幸作さんの日記によるものです)